



## 勝者なき選挙

### — 混迷を映し出したイラクの県議会選挙結果 —

(一財) 日本エネルギー経済研究所  
中東研究センター

主任研究員 吉岡明子

はじめに

イラクの統一地方選挙である県議会選挙が、2013年4月と6月に14県で行われた。これは来年予定されている国民議会選挙の前哨戦となるものであり、選挙の結果は、現時点での政党支持率を表すバロメータと言える。ここで表明された民意の行方は、来年の国政選挙に出馬する主要政党すべてにとって、とりわけ、三戦目を目指すマーリキ首相にとって、極めて重要な指標となる。また、県議会選挙は民主化プロセス

の一環として位置づけられるものであり、選挙制度の変更は今後の国政選挙にも影響を与える。そうした点を踏まえて、以下では、有権者の投票行動や政党間の連合形成模様も含めて今回の選挙を振り返り、その主な特徴をまとめて今後の選挙に与えるインプリケーションを考察したい。そして、首都バグダード、シーア派政党にとっての主戦場である南部地域、同じくスンナ派政党にとって重要な中部地域のそれぞれにおける選挙結果を考察し、今後の国政に与え

図表：イラク県地図



る影響を分析する。

なお、北部のドホーク、エルビル、スレイマニーヤの3県は、KRG（クルディスタン地域政府）が支配する自治区になっているため、独自に県議会選挙日程が設定される予定であり、他県と同じタイミングでは行われていない<sup>(1)</sup>。また、クルディスタン地域への併合問題が決着していないキルクーク県についても、民族・宗派間バランスへの特別な配慮が必要と認識されており、同県の議会選挙は2009年に延期されたまま、今回も実施されなかった。従って、これら4県を除く14県が本稿の分析対象となる。

#### 〈選挙制度〉

イラクの県議会は任期4年で、前回の県議会選挙が2009年1月に行われたため、今回の選挙はその任期満了に伴うものである。有権者に選出された議会が過半数の賛成で県知事を選ぶ仕組みだが、県知事自身は必ずしも議会議員である必要はない。議席定数は人口に応じて決定され、最も多いバグダード県は58議席だが、その他の県は30議席前後である<sup>(2)</sup>。県によっては、少数派（キリスト教徒やトルクマン民族、シーア派クルド人など）に、あらかじめ数議席が割り当てられている場合があり、例えば、バグダード県では58議席のうち4議席はこの少数派枠となる。

選挙制度は各県を一区とする比例代表制で、全国で8,138名が立候補して議席を争った。前回の2009年から、非拘束名簿式（オープンリスト方式）が採用されており、党が得た議席は、得票数の多い候補者から順に割り当てられる仕組みとなっている<sup>(3)</sup>。今回の選挙からの変更点として、サンラグ方式による議席分配の仕組みが導入された。これまでは、大政党が有利なヘア式が採用されていたが、それに対して小党が裁判所に訴え、2010年に最高裁判所がこのシステムは違憲だとの判断を下していた<sup>(4)</sup>。主要政党はいずれも改正に乗り気ではなかったためこの問題

---

#### 筆者紹介

1999年大阪外国語大学外国語学部卒。中東経済研究所を経て2005年より現職。2007年にガルフ・リサーチ・センター客員研究員。専門はイラクの現代政治・経済並びにイラクにおけるクルド問題。

---

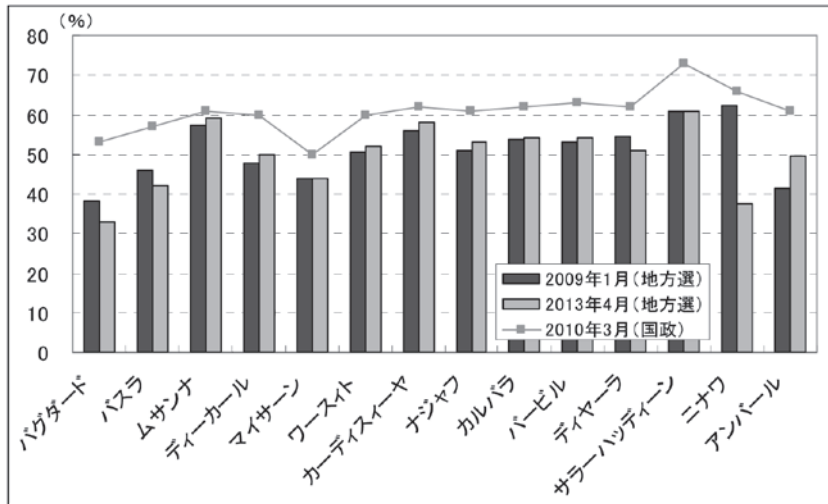
への対処が遅れていたが、宗教界からの反発を受けたこともあり<sup>(5)</sup>、2012年12月の選挙法再々改正法案で、ようやく小党により有利な議席配分となるサンラグ方式に改められた。その結果、この選挙制度の変更によって、従来は足きりライン以下だった小党が議席を獲得するケースが確認された。例えば、筆者の試算結果では、バグダード県では4党が制度改変の恩恵にあずかって1議席を獲得したが、その分、大政党が割を食う形となり、上位8党のうち3党が1～2議席ずつ失う結果となっている<sup>(6)</sup>。

イラクでは過去10年間継続してきた政治プロセスにおいて、選挙の度に選挙法が改正され、それが次回選挙の基礎になってきたという経緯がある。今回のサンラグ方式は来年の国政選挙でも適用される可能性が高く、そうなれば、国会でも小政党の議席が増えることになると見られる。

#### 〈選挙の実施〉

今回の県議会選挙は、2度に分けて実施された。当初は4月20日に一斉に行われる予定であったが、昨年末から反政府デモが続くアンバール県とニナワ県については、治安上の懸念を理由に最大6ヵ月延期する旨、政府が3月に決定した。イラクでは過去10年間、どれほど治安が悪い時でも選挙は実施してきた。そのため、この選挙延期の真の理由は、デモが収拾しない中で選挙を行えば、政権に批判的な勢力が躍進することを懸念したためではないかと考えられる。その後、速やかな選挙実施を求める国連や米国からの圧力もあり<sup>(7)</sup>、政府は改めて5月に、

図表：県別投票率の推移



出所：2009年は有権者数と投票数から筆者算出。  
2010年と2013年は各種報道による。

2県の投票日を6月20日と決定した。しかし、折しも4月20日の1回目の選挙実施と相前後して、キルクーク県でデモ隊と治安部隊の衝突が発生し、その後イラクの治安は急速に悪化することになる<sup>8)</sup>。従って、むしろ6月の実施となったことでニナワ県とアンバル県はより厳しい治安状況下で選挙を行わざるを得なくなったことは皮肉と言えよう。

4月の投票日まで、殺害された候補者は14名に上っていたが、さらに6月の投票日まで、ニナワ県の候補者2名が殺害された。いずれの投票日も、兵士や警察官が街中に展開し、許可車両以外の自動車運転は禁止されるなど厳重な警備体制を敷かれたが<sup>9)</sup>、4月の投票日にはいくつかの投票所に迫撃砲やロケット弾が打ち込まれて負傷者が発生、6月の投票日には、迫撃砲や開票センターへの自爆テロで、10名近い死者が発生した。

選挙自体は両日とも大きな混乱なく終了したものの、こうした厳しい治安状況は、投票率に影響した可能性がある。例えば、全国平均投票率は44.3%だったが<sup>10)</sup>、選管発表によるとニナ

ワ県の投票率は37.5%にとどまった。同県では中心都市のモスルを中心に、特に4月以降テロ事件が多発している。一般的に各県における選挙ごとの投票率の動向はそれほど大きく変化するものではないが、ニナワ県に関しては、2009年の県議会選挙(62.2%)と比較して投票率の低下が際立つ結果となった。

#### 〈選挙の特徴1：選挙連合の形成模様〉

選挙結果の分析に入る前に、今回の選挙の特徴的な出来事として、2つを指摘したい。1つ目は、効率よく得票するための宗派単位の大連合の形成が顕著に見られたことである。従来からイラクの選挙では、シーア派を支持基盤とする政党は中部のスナ派住民の票が取れず、逆にスナ派の政党は南部のシーア派住民の票が取れないという傾向があった。それでも、2010年の国政選挙では、シーア派宗教政党のダアワ党を中心とする法治国家連合や、世俗派・スナ派中心のイラーキヤが、イラク全土を代表する政党であることを打ち出す選挙キャンペーンを繰り広げ、北部クルディスタン地域の3県を

除く15県すべてで候補者を擁立するなど、幅広く住民の支持を得ようとする試みが存在した<sup>11)</sup>。しかしながら、その後発足した第二次マールキ政権において政党間対立が激化していることもあり、今回の県議会選挙では、イラクの一体性を強調するような動きは後退している。シーア派政党は南部を中心に、スンナ派政党は中部を中心に候補者を擁立するという従来からの傾向が踏襲されたのみならず、スンナ派住民が多い混住地域（サラハッディーン県、ニナワ県）では、南部ではライバルであるシーア派政党が大連合を組んで出馬し、票の一本化を図るという試みが見られた。同様に、シーア派住民が多い混住地域（バービル県）では、スンナ派政党が大連合を組んでいる。また、同じくシーア派

とスンナ派の混住地域であるディヤラ県では、双方が大連合を形成した。従って、いずれの政党もそれぞれの宗派の有権者の支持を固めることを最優先して、選挙用の大連合を形成したことが指摘できる。

そして、選挙結果を見る限り、こうした大連合の形成は極めて有効であった。2009年の選挙の際にシーア派政党がごとごとく議席獲得に失敗したニナワ県では、今回はシーア派の大連合が2万718票（得票率3.5%）の票を集めて1議席獲得に成功した。また、ディヤラ県では17万292票（同37.2%、12議席）を集めて、スンナ派大連合の14万9,535票（同32.7%、10議席）を上回り、第一党に躍進した。スンナ派大連合も、南部のバービル県で2.3%（1万2,754票）を集め

図表：主要政党連合

シーア派
<b>法治国家連合</b> （代表：ヌーリ・マールキ首相，ダアワ党党首） ダアワ党，ファディーラ党，バドル組織（アーミリ運輸相），独立グループ（シャハリスターニ副首相）など，23の政党連合
<b>市民連合</b> （代表：アンマール・ハキーム師，ISCI 党首） ISCI，イラク国民会議（チャラビ元副首相），ボラニ元内相など，21の政党連合
<b>サドル派</b> （アフラル連合代表：ディヤ・ナジュム・アブダッラ・アル・アサディ） アフラル連合（2政党の連合）と，3政党（独立国民選択潮流，国民参加グループ，市民国家ブロック）にわかれて出馬
スンナ派
<b>ムッタヒドゥーン</b> （代表：ウサーマ・ヌジャイフィ国会議長） 国家統一ハドバ・グループ（ヌジャイフィ・ニナワ県知事），イラク・サフワ会議（アブ・リーシャ）など，10の政党連合
<b>アラブ・イラーキーヤ</b> （代表：サーリフ・ムトゥラク副首相） 国民対話イラク戦線，ハッル党（カルブーリ産業相）など，8の政党連合
<b>イラーキーヤ</b> （代表：アッラーウィ元首相） 世俗派を中心とする19の政党連合
クルド
<b>同胞と共生の同盟リスト</b> （代表：ナジュムッディーン・キルクーク県知事） KDP，PUK，ゴラン，KIU など，クルド政党8党の連合

出所：選管資料，各種報道などから筆者作成。

た結果、1議席を確保するに至った。選挙後は、県知事など要職の選出のためにいずれの政党も他党との連立関係の構築が不可避であるが、その前段階である選挙の時点では、宗派内の支持固めに専念するという姿勢が顕著に見られた選挙であった<sup>23</sup>。

こうしたトレンドに反して独自路線を貫いたのが、イラーキーヤである。イラーキーヤはイヤード・アッラーウィ元首相を中心とする世俗派やスンナ派が多い政党で、今回の選挙では独自に14県すべてに候補者を立てた。従来から唱えている脱宗派主義を目指す動きと言えよう。しかしながら、イラーキーヤは2010年の国民議会選挙では第一党になったものの、その後の連立交渉で首相ポストを逃して政権内で傍流化してからは、内部の分裂傾向が著しい。マーリキ首相と協調路線を敷いて、すでにイラーキーヤと袂を分かった自由イラーキーヤ、白国民ブロックは、今回の選挙には別の政党として選挙に出馬している。現イラーキーヤからも、ムッタヒドゥーン、アラブ・イラーキーヤが、それぞれイラーキーヤとは異なる政党連合を組んで出馬しており、かつてのイラーキーヤの票は大きく分散した。とりわけ、政権内でポストを得ることができなかったアッラーウィ代表の退潮は顕著で、イラーキーヤ本体の獲得議席は多い県でも3議席（全国合計で16議席）に留まる結果となった。従って、イラーキーヤの宗派横断的な出馬は、宗派内での票固めを優先する今回の選挙の傾向に、一石を投じるには至らなかったと総括できよう。

## 〈選挙の特徴2：死票の低下〉

2つめの特徴は、有権者が投じる票の収斂傾向である。県議会選挙における立候補政党は、国政に参加している主要政党連合と、それ以外の地元政党に大別できるが<sup>24</sup>、今回の選挙においては、まず、主要政党連合の得票率の上昇が確

認された。2009年の選挙では、全投票数のうち、主要政党連合の得票数（死票含む）は全体の65.9%だったが、今回はその割合が75.4%まで上昇している。

さらに、こうした主要政党連合以外、地元政党に投じられる票にも、収斂傾向が見られたことが指摘できる。なぜならば、投票全体における死票の割合が劇的に低下したからである。2009年には、県によって死票の割合は少ないところでは17.5%、多いところでは60.1%に上り、全体では30.5%が死票となった。上記の主要政党連合に投じられた票において死票は5.5%だったので、地元政党へ投じられたものの議席獲得に至らず死票となった票は全投票数の25.0%に上ったことになる。今回の選挙では、死票の割合はほとんどの県において1割以下で、全体でも4.9%にとどまった。そのうち、主要政党連合の得票における死票は0.5%だったため、地元政党への投票のうち死票となった割合は、わずかに4.4%ということになる。

これには、上述の通り小党に有利な選挙システムが採用されたことで、従来なら死票となっていた票が議席に反映されたという影響もある。しかし、筆者の試算<sup>25</sup>では制度改変に伴って削減された死票は、総投票数の5.6%（40万1,479票）に過ぎず、仮に前回と同じ選挙システムが採用されていたとしても、死票は総投票数全体で10.5%（地元政党に投じられた分では10.0%）に留まることになる。これは2009年の30.5%と比較すると大幅な低下である。

このように、有権者の投票行動として、より主要政党連合が票を集める傾向が指摘されると同時に、投票先が地元政党であったとしても、票が拡散していた前回の選挙と比較して、知名度のある候補者を抱える有力政党を中心に、票が一定程度収斂する傾向が見られるようになっていと言えよう<sup>26</sup>。これは、選挙システムがより有効に機能するようになってきている現れでもあ



り、歓迎すべき変化と言えよう。

地元政党の躍進における典型的なケースとしては、県知事などの、いわば地元の名士が集票するケースと、テクノクラート集団による集票に大別できる。前者は、ナジャフ県のズルフィ県知事の「ナジャフの忠誠」(11.8万票、9議席)、サラハッディーン県のアブドゥルジュブリー県知事の「イラクの民連合」(9.5万票、7議席)、アンバール県のジャハダーウィ県知事の

「アービルーン」(6.1万票、5議席)、カルバラ県のハッピービ元市長の「リワ」(3.4万票、3議席)及びムサウィ県議会議長の「二大河の希望」(3.3万票、3議席)などが代表例であろう。後者は、バスラ県のビジネスマン協会バスラ支部を母体とする「独立バスラ連合」(2.9票、2議席)、カーディスィーヤ県のテクノクラートを中心とする「独立ディワニーヤの民連合」(5.0万票、4議席)等が挙げられる。

図表：県別・政党別得票数及び得票率

県別・政党別得票数	バグダード	バスラ	ムサンナ	ディカール	マイサーン	ワースイト	カーディスィーヤ	ナジャフ	カルバラ	バービル	ディヤール	サラハッディーン	アンバール	ニナワ
法治国家連合	569,178	292,658	76,777	176,861	77,917	96,664	114,697	76,519	84,447	142,568			-	
市民連合	163,022	121,875	67,203	122,088	63,060	86,403	66,691	82,020	33,362	115,188	170,292	39,447	-	20,718
サドル派	296,731	58,312	31,290	108,008	100,677	63,584	50,544	59,481	43,945	70,434			-	
グアワ党国内支部	24,339	15,493	-	-	5,615	-	29,517	7,571	-	19,527			-	-
ムッタヒドゥーン	183,716	10,386	-	-	-	-	-	-	-	12,754	149,535	79,705	113,040	123,161
アラブ・イラーキーヤ	70,644	-	(309)	-	-	-	-	-	-	-		24,167	56,519	62,793
イラーキーヤ	80,066	13,319	(4,375)	(6,855)	(771)	13,055	(3,311)	(2,599)	(4,887)	24,227	27,670	46,287	38,675	29,951
自由イラーキーヤ	15,957	-	-	-	-	-	-	-	(2,150)	20,755	(2,133)	95,338	-	8,105
白国民ブロック	-	(8,247)	-	-	-	-	33,092	-	-	-	(527)	-	-	-
同胞と共生の同盟リスト	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	49,415	21,373	-	166,729
その他議席獲得政党 (少数派枠含む)	51,466	102,186	69,557	111,588	21,419	91,172	78,651	167,184	138,757	128,328	31,915	108,441	179,288	156,317
死票	103,137	33,708	6,029	15,720	3,665	5,799	12,894	10,546	23,215	14,890	28,475	52,433	16,341	28,785
有効投票数	1,558,256	647,937	250,856	534,265	272,353	356,677	386,086	403,321	323,726	548,671	457,302	467,191	403,863	596,559

各県毎の政党別得票率	バグダード	バスラ	ムサンナ	ディカール	マイサーン	ワースイト	カーディスィーヤ	ナジャフ	カルバラ	バービル	ディヤール	サラハッディーン	アンバール	ニナワ
法治国家連合	36.5%	45.2%	30.6%	33.1%	28.6%	27.1%	29.7%	19.0%	26.1%	26.0%			-	
市民連合	10.5%	18.8%	26.8%	22.9%	23.2%	24.2%	17.3%	20.3%	10.3%	21.0%	37.2%	8.4%	-	3.5%
サドル派	19.0%	9.0%	12.5%	20.2%	37.0%	17.8%	13.1%	14.7%	13.6%	12.8%			-	
グアワ党国内支部	1.6%	2.4%	-	-	2.1%	-	7.6%	1.9%	-	3.6%			-	-
ムッタヒドゥーン	11.8%	1.6%	-	-	-	-	-	-	-	2.3%	32.7%	17.1%	28.0%	20.6%
アラブ・イラーキーヤ	4.5%	-	(0.1%)	-	-	-	-	-	-	-		5.2%	14.0%	10.5%
イラーキーヤ	5.1%	2.1%	(1.7%)	(1.3%)	(0.3%)	3.7%	(0.9%)	(0.6%)	(1.5%)	4.4%	6.1%	9.9%	9.6%	5.0%
自由イラーキーヤ	1.0%	-	-	-	-	-	-	-	(0.7%)	3.8%	(0.5%)	20.4%	-	1.4%
白国民ブロック	-	(1.3%)	-	-	-	-	8.6%	-	-	-	(0.1%)	-	-	-
同胞と共生の同盟リスト	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	10.8%	4.6%	-	27.9%
その他議席獲得政党 (少数派枠含む)	3.3%	15.8%	27.7%	20.9%	7.9%	25.6%	20.4%	41.5%	42.9%	23.4%	7.0%	23.2%	44.4%	26.2%
死票	6.6%	5.2%	2.4%	2.9%	1.3%	1.6%	3.3%	2.6%	7.2%	2.7%	6.2%	11.2%	4.0%	4.8%
有効投票数	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

出所：選管資料より筆者作成

注：サラハッディーン県の死票割合には、選挙直前に失格とされた Jabha al-Ansaf に投じられた 2万7,654票を含む。

カッコは主要政党が議席を獲得できなかったケース。

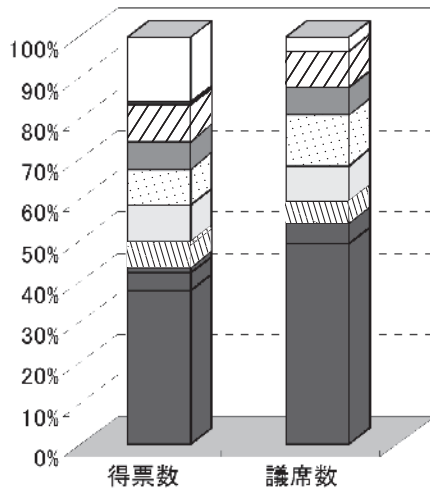
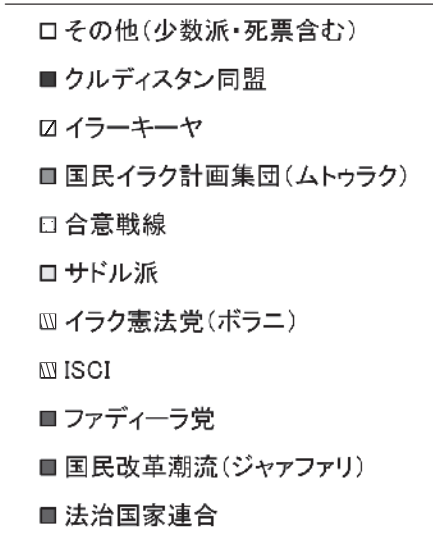
〈選挙結果：バグダード〉

ここから主要政党連合を中心とする選挙結果の分析に移りたい。まず、留意すべき点は、選

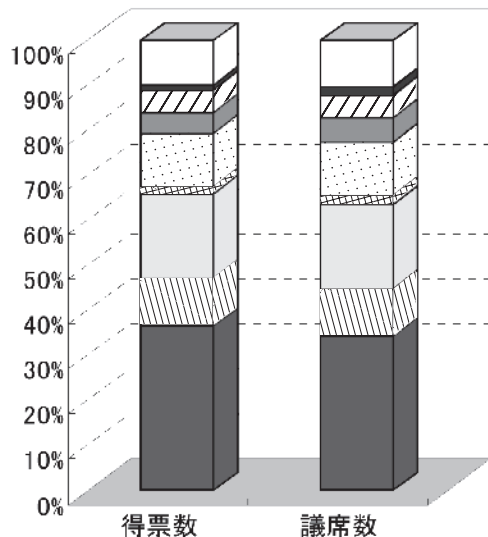
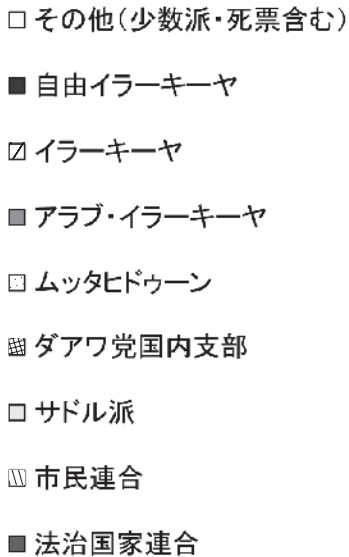
挙が14県で実施されたとはいえ、実質的にシーア派政党とスンナ派政党では主戦場がそれぞれ南部と西部に分かれており、互いに競合はして

図表：バグダード県における得票・議席割合の比較

2009年



2013年



出所：選管資料より筆者作成

いないということである。従って、シーア派政党にとっては首都バグダードと南部で、スンナ派政党にとっては同じくバグダードと中部で、それぞれどれだけ票や議席を得られたのかという点が、最も注目されるべき選挙結果ということになる。

双方にとってバグダード県が重要な戦場と位置付けられるのは、首都であるがゆえに政治的な重みを持つことはもちろん、人口面で726万人とイラク全土の2割強を占め、さらに、宗派や民族の観点でも混住地区で全国の縮図という特徴があるためである<sup>106</sup>。以下では、バグダード県の選挙結果を概観した上で、南部、中部のそれぞれの選挙結果を詳述する。

バグダード県で最も多く得票し第一党となった政党は、マーリキ首相率いる法治国家連合であった。56万9,178票（得票率36.5%）を得て、58議席中20議席を獲得し、2009年に引き続き首相が首都で第一党を守った。法治国家連合の得票率は、37.9%から36.5%への微減ながら、ほぼ変わっていない。しかしながら、前回の選挙で別の政党連合から出馬していたファデーラ党や、ジャアファリ元首相率いる国民改革潮流も、今回は法治国家連合に合流しており、これら2党と法治国家連合をあわせた2009年の得票率は43.5%に上っていた。さらに、かつてはISCI（イラク・イスラーム最高評議会）の軍事部門だったバドル組織も2012年にISCIと袂を分かって現在は法治国家連合の一員となっている。そうした点を勘案すれば、実質的に法治国家連合は票を減らしたということになり、勢いの低下は否めない。

今回の苦戦の最大の背景は、すでに政権二期目を折り返している首相に、誇れる成果としてのセールスポイントがないことに尽きるだろう。2009年の地方選挙、2010年の国政選挙において、首相はイラクの治安を回復した強いリーダーとして国民の人気を集めることに成功し

た。2008年以降の治安改善には米軍の功績も大きかったと考えられるが、少なくともイラク国内ではマーリキ首相の手腕が高く評価された<sup>107</sup>。しかし、最悪期よりはるかに改善したとはいえ、その後も1ヵ月あたり200～500人がテロの犠牲になるという状況が継続し、治安問題の解決には至っていない。さらに、石油生産量は上向いているが、経済復興全般の足取りは遅く、市民の最大の関心事である電力不足問題にも解決の目処が付いていない。政治面でも、挙国一致内閣を形成してはいるが、閣内の足並みの乱れは大きく、政党間対立によって重要法案が立ち往生する場面が繰り返されている。そうした状況ゆえに、一時のマーリキ人気は明らかに陰りが出ている。

他方、同じシーア派政党においては、ISCIを中心とする市民連合、及びサドル派は、大きく票を伸ばした。市民連合の得票数は2009年比で77.7%、サドル派は同96.4%増加し、市民連合の議席数は3から6へ、サドル派は5から11へと躍進した。とりわけサドル派については、バグダード県で主力のアフラル・ブロック以外に、3つの政党が出馬していることが特筆される。そしてその3党合計で15.9万票（得票率10.2%、計6議席）を獲得し、アフラル・ブロック（13.8万票、同8.8%、計5議席）を上回る成果を上げた。複数の政党による出馬は、これまで貧困層を伝統的な支持基盤としてきたサドル派が、より都市部の知識人階層に支持層を広げようとする試みの一環ではないかとも見られている<sup>108</sup>。

スンナ派政党の選挙結果については、ヌジャイフィ国会議長を中心とするムッタヒドゥーンが18.4万票（得票率11.8%）を獲得して7議席を得た。法治国家連合、サドル派に次ぐ第3位となり、スンナ派政党の中ではトップだった。続いて、イラーキーヤが8万66票（同5.1%、3議席）、アラブ・イラーキーヤが7万644票（同4.5



%, 3議席), 自由イラーキーヤが1万5,957票(同1.0%, 1議席)という結果になっている。スンナ派を中心とする上記4党の得票率は22.5%で、2009年の合意戦線、国民計画集団、イラーキーヤの総得票率が24.5%であったため、この割合は大きく変わっていない。指導部の主な顔ぶれからは、大まかにムッタヒドゥーンが合意戦線の、アラブ・イラーキーヤが国民計画集団の後継と位置付けられるだろうが、同じ名称を保っているイラーキーヤも含めて、過去4年間にそれぞれの政党連合をまたいで連立の組み替えが起こっているため、支持層も動いた可能性がある。

2009年の選挙では、法治国家連合が28議席を得る一方で、その他の政党はいずれも一桁の議席しか得られず、バグダードでは法治国家連合の一人勝ちの様相であった。それが今回は、20議席でトップを守ったとはいえ、サドル派が11議席、ムッタヒドゥーンが7議席、市民連合が6議席と、他党の顕著な追い上げが見られた。加えて、首相との協調路線を打ち出していたアラブ・イラーキーヤや自由イラーキーヤが振るわなかった点も、法治国家連合の伸び悩みと並んで、首相にとっては懸念材料であろう。さらに、選挙後の連立交渉においては、法治国家連合以外のほぼ全ての主要政党が連立を組み、サドル派から県知事、ムッタヒドゥーンから県議会議長を選出し、法治国家連合は両ポストを失う結果となった<sup>19)</sup>。首都における退潮は、今後のマリーキ首相の政権運営へも影響を与える可能性があるだろう。

### 〈南部の選挙結果〉

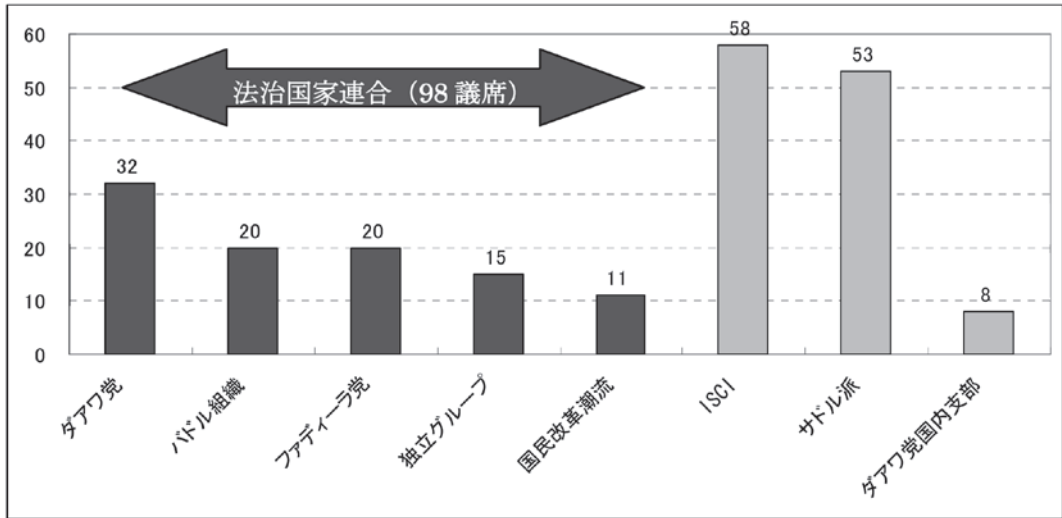
第一党を保ったもののその勢いに陰りが見られるという法治国家連合の現状は、バグダード県のみならず、南部各県でもみられた。南部9県全体における法治国家連合の得票率は30.6%で、これは2009年の法治国家連合及び国民改革

潮流、ファディーラ党を合わせた28.9%とほぼ同じである。従って、法治国家連合は今回の選挙でその得票を減らしたわけではない。9県のうちナジャフ県とマイサーン県を除く7県では第一党の座を維持した。しかしながら議席数で比較すると、法治国家連合は2009年には南部9県で合計94議席(ファディーラ党と国民改革潮流を合わせると118議席)<sup>20)</sup>を得ていたのに比較して、今回獲得した議席は77議席に留まった。

しかも、その内実に目を転じると、マリーキ首相の足下の危うさが際立っている。法治国家連合はそもそも、マリーキ首相率いるダアワ党をその中心勢力として2009年に結成された。だが、今回の選挙結果を個別政党ごとに分解してみると、法治国家連合が全国で得た98議席のうち、ダアワ党が得た議席は3分の1弱の32議席でしかない。その他、2012年にISCIと袂を分かって法治国家連合に参入したバドル組織が20議席、首相の右腕でエネルギー問題を統括しているシャハリスターニ副首相率いる独立グループが15議席、ファディーラ党と国民改革潮流がそれぞれ20議席と11議席という結果であった<sup>21)</sup>。逆に言えば、それなりに集票力のある勢力を傘下に抱えていることが法治国家連合の強みとも言えるが、現職の首相が率いているがゆえにそうした勢力をつなぎ止めることができているという側面も少なからずあるだろう。従って、ダアワ党の低迷が法治国家連合の結集力に与える影響を注視する必要がある。

首相は、機動性や決定力を欠く挙国一致内閣から、政策の方向性を同じくする政党だけで形成する「多数派の政府」に移行したい旨を度々公言しており、選挙前にも、県議会選挙で勝利して国民の支持を背景にその後政界再編に乗り出すという意欲を見せていた<sup>22)</sup>。しかしながら、法治国家連合が第一党の座は守ったとはいえ、その中でダアワ党が大きく支持を落とした現状では、首相が主導する形で多数派の政府形成に

図表：シーア派政党の獲得議席数一覧



出所：Ain, 2013.05.06.

注：ニナワ県でシーア派大連合が得た1議席は含んでいない。

また、政党連合単位の選管による発表の集計と一部合わないところがある。

動ける状況ではなくなったと言える。

他方、市民連合は全国で61議席を得たが、そのうち58議席が中核のISCIの議席である。2009年の選挙時には、ISCIとバドル組織を合わせて53議席であったが、今回は単独政党としては最大の議席を獲得した。ISCIは2009年の選挙では、南部各県をまとめてシーア派地域（自治区）を形成するといった地方分権を唱えていたが、広く支持を得ることができず、選挙で敗北した。同年8月に死去した父アブドゥルアジーズ・ハキームの跡を継いでISCI党首に就任したアンマール・ハキームはその後、そうしたシーア派地域構想を前面に打ち出さなくなっている。そして、バドル組織が抜けた穴を埋めるために「希望の騎士団」という若者組織を形成して草の根の動員を強化すると同時に、今回の選挙では、「私の県が一番」とのキャッチフレーズの下、例えば古代遺跡を多く抱えるバービル県では遺跡補修を強調する等、地元のニーズに密着した姿勢を打ち出すキャンペーンを展開した<sup>23</sup>。ISCIは現在の第二次マリーキ政権に名目上参加して

いるが、大臣ポストなど要職を一つも得ていない<sup>24</sup>。そのため、公共サービスの復興が進まない中で、こうした選挙キャンペーンによって現政権への批判票の受け皿になることに成功したと考えられる。

サドル派は、南部県ではアフラール・ブロックが主力であったが、他に国民参加集団がバービル、ナジャフ、マイサーンの各県に出馬した。この2政党をあわせると、9県合計の得票数は58.6万票（15.7%）となり、法治国家連合、市民連合に次ぐ第3位の勢力につけた。サドル派は、上述のように複数の政党を擁立して支持層を広げようと試みた他、候補者の学歴を選挙ポスターに提示して有権者にその能力をアピールするといった選挙戦術を採用していた<sup>25</sup>。サドル派は、住宅省や計画省など、経済復興に関わる省の大臣ポストを得ているだけに、どの程度、公共サービスの改善を求める有権者の受け皿になったかは定かではないが、シーア派政党の中ではもっともマリーキ首相と政治的に対立を繰り返しているだけに、首相に対する批判票を集め

た可能性はあろう。

南部各県における県知事と県議会選挙の選出にあたっては、ISCIとサドル派が連立を組んで法治国家連合を閉め出す形で交渉が一旦は進んだが、法治国家連合も小党と組んで巻き返すなど紆余曲折が見られ、結局、ISCI・サドル派連合が法治国家連合を閉め出したのはワースイト県だけに留まった。南部9県の県知事ポストのうち、ムサンナ、カーディスィーヤ、バービルの各県は法治国家連合、バスラ県、ワースイト県はISCI、マイサーン県はサドル派、それ以外は地元政党が得る結果となった<sup>98</sup>。

### 〈中部の選挙結果〉

中部の選挙においては、バグダード県同様、ムッタヒドゥーンが頭角を現した。アンバール県で11.3万票（得票率28.0%）、ニナワ県で12.3万票（同20.6%）を得票し、アンバール県では第一党、ニナワ県ではクルド政党に次ぐ第二党となった。しかしながら、上述の通り、中部では、昨年末からマーリキ首相の政権運営に反対するデモが続くという特殊な状況にある。そうした中で、主要政党の中ではデモ隊に最も近く、彼らを代弁する立場に立っていたムッタヒドゥーンにとって、この得票率は決して満足のいくものとは言えないだろう。彼らが期待されたほど得票できなかった背景には、デモ隊の一部が過激化して武装勢力との連携を深め、とりわけ4月以降、イラクの治安が悪化していったことから、内戦や分裂を懸念する有権者の票をムッタヒドゥーンが失った可能性がある<sup>99</sup>。また、そうしたデモやテロ事件が続く政情ゆえに、部族を中心とする地元政党との間で票が割れたとみられる。

ムッタヒドゥーンの前身は2009年のニナワ県議会選挙に出馬して第一党となったハドゥバである。党首のアスィール・ヌジャイフィがニナワ県知事に就き、その翌年の国民議会選挙後は

兄のウサーマ・ヌジャイフィが国民議会議長を務めている。ウサーマ・ヌジャイフィは2005年の移行政権期にも工業相を務めていたが、とりわけ国会議長となった過去3年間の間に、スンナ派を代表する政治家の一人として知名度を高めており、ヌジャイフィ兄弟の人気を背景に今回の県議会選挙で、新政党となるムッタヒドゥーンを立ち上げたという経緯がある。従って、期待されていたほどではないにせよ、主要スンナ派政党連合の中では最も集票に成功したムッタヒドゥーンの動向は、来年の国政選挙においても鍵になると考えられる。

アラブ・イラーキーヤはサーリフ・ムトゥラク副首相を中心とする政党で、ムッタヒドゥーンと同様、もともとはイラーキーヤの一部である。ムトゥラク副首相は、マーリキ首相を「独裁者」と呼んだことから首相が議会に罷免を要求するなど、2011年末頃から首相との関係が悪化していたが、2012年8月に首相と和解し、閣議に復帰した<sup>100</sup>。その後は首相と協調路線をとっており、スンナ派地域で拡大するデモに対しても、デモ隊と共に首相批判を繰り広げるのではなく、閣内における立場を活用して首相から譲歩を引き出すという方針をとっている。その成果が、4月に発表された脱バアス党政策の緩和、旧軍人の再雇用、フセイン元大統領の親衛隊への年金支給といった譲歩案であった<sup>101</sup>。しかしながら、その実施には今後の議会承認を必要とするものも含まれており、どの程度実現するかは不透明である。サラーハッディーン県、アンバール県、ニナワ県の3県合計の得票数は14万3,479票と、ムッタヒドゥーンの31万5,906票の半分に留まり、水をあけられた。

中部においては、イラーキーヤも4県合計で14万2,583票（得票率7.4%）を得票しており、退潮傾向は否めないが依然として主要勢力の一つではある。加えて、バグダード県で8万66票、南部9県で7万3,399票を得ており、議席を獲得

できなかった県も多いものの、全国区で支持を維持しているという意味では、国政選挙での動向が注目される。

なお、スンナ派政党の間では、地方分権を巡って政策面での重要な差異が見られる。従来、スンナ派地域ではイラクの一体性を強調する中央集権への支持が強かったが、中央政府の指揮下で治安部隊がテロ対策のために多数のスンナ派住民を拘留したり、脱バアス党政策の一環で大学教員が追放されたりすることへの反発が高まっており、その対抗として、クルディスタン地域をモデルに強い自治権を持った地域政府を形成するという動きが見られ始めた。ムッタヒドゥーンの前身のハドゥバは、当初、クルド政党の勢力拡張に反対するアラブ・ナショナリストの政党であったが、アスィール知事は上記のようなマーリキ首相の強権的な統治手法への反発から、2012年半ばからクルディスタン地域政府との融和路線に転じ、同様の自治区の形成を支持するようになっていく<sup>9)</sup>。しかしながら、イラク憲法が定める自治区の権限が極めて強いことから、とりわけ民族や宗派に根ざした地方分権は国家の分裂につながるとの忌避感も強く、イラーキーヤやアラブ・イラーキーヤはそうした自治区形成を支持していない。比較的票が分散した中部の選挙結果を見る限り、そうした自治区を巡る民意は未だ定まっていまいと言えよう。

#### おわりに

県議会選挙が、2回に分かれたとはいえ当初の予定通り14県すべてで実施されたことは、民主化プロセスにおける進展の一つと位置づけられる。死票が大幅に減り、より議席を得られる政党へと票が収斂する傾向が見られたことも、地方選挙というシステムの成熟を示している。他方、死票が減ったことで相対的に主要政党が得られた議席は減少した。主要政党の間では、

その不利益を補填する意味もあって、小党が有利な議席分配方式であるサンラグ方式への反発が一層高まる可能性もあろう。その場合、来年の国民議会選挙のための新選挙法案の成立が遅延することが懸念される。また、投票日当日に厳戒態勢を敷いても死者の発生を免れ得ないという治安状況も、憂慮すべき事態である。治安状況の影響で特定の県で投票率が極端に低くなれば、国民議会選挙後に成立する政府の正統性をも脅かしかねない。

選挙の結果は、シーア派政党にせよスンナ派政党にせよ、総じて第一党の優位が盤石なものではなく、いわば、勝者なき選挙であったと総括できる。首都で首位を保った法治国家連合はその人気に陰りが見えており、追い上げを見せた他党も法治国家連合を追い抜くことはできなかった。ムッタヒドゥーンもデモ隊との連携を票に転化しきれず、スンナ派政党の中で支配的な勢力として確立したとは言いがたい。いずれの政党も、今後の国政選挙の方向性を位置づけるだけの力を見せるには至っておらず、現在の政界の混迷を反映する選挙結果であった。それは南部における県知事選出が各党の痛み分けに終わったことから確認できよう。

現時点では、いずれの政党も支持基盤はシーア派ないしはスンナ派に偏っており、宗派内の集票を強化するという今回の選挙の特徴が、来年の国政選挙でも続くだろう。だが、国政選挙であるがゆえに、選挙前に特定のスンナ派政党とシーア派政党が大連合を形成し、広く国民の信を問うという動きが出てくる可能性はある。今回の選挙で地元の票を固めた地元政党が国政に打って出てくるケースも考えられ、それらの政党と主要政党の連携も重要なポイントになるだろう。勝者なき選挙であったからこそ、来年の国民議会選挙に向けて、あらゆる選択肢が開かれている。



(注)

- (1) 北部3県では、県議会選挙は2005年1月にイラク全土で統一実施された後、一度も実施されていない。KRGの与党であるKDP（クルディスタン民主党）とPUK（クルディスタン愛国同盟）は、2000年代半ばから域内で存在感を出し始めた野党が躍進することを恐れて、選挙を延期し続けていると言われている。2013年8月時点では、11月21日に実施予定と報じられている。
- (2) 過去4年間の人口増を反映して、前回選挙時から1～2議席増えた県もある。
- (3) 国政選挙同様、女性優先枠が存在するため、党内で議席を配分する際、一定割合で女性候補者が優先的に当選となる。
- (4) Niqash, 2012.08.09 ; Inside Iraqi Politics, Issue No.44, p.7.
- (5) Idha' al-Iraq al-Hurr, 2012.08.25.
- (6) 特にトップの法治国家連合は、制度改変により2議席を失った。
- (7) NINA, 2013.04.21 ; United Nations News Centre, 2013.04.24.
- (8) デモの発生やそれに伴う治安悪化については、拙稿「マーリキ・イラク首相の強権統治とその反動」『海外事情』2013年7・8月号参照。
- (9) 選挙当日に治安維持任務に就く兵士及び警察官は、投票日の1週間前に設けられる特別投票日に投票することになっている。
- (10) 登録有権者数1,627万1,240名（UNAMI, 2013 Iraqi Governorate Councils Elections, Updated Fact Sheet, 11 Arp 2013）と、有効投票数720万7,063票（選管発表の選挙結果から筆者集計）から算出した。
- (11) ただし、イラーキーヤは南部9県のうち3県で、法治国家連合は中部5県のうち4県で、議席獲得に至らなかった。
- (12) なお、クルド政党も同様の傾向にある。ク

ルディスタン地域内では与党と野党に明確に分かれているが、今回の選挙においては、与野党相乗りで大政党連合を形成してディヤラ県、サラーハッディーン県、ニナワ県に出馬し、クルド票を固めて議席の獲得に至った。とりわけニナワ県では、16万6,729票（得票率27.9%、11議席）を獲得して第一党になっている。

- (13) 国政に携わっている主要政党はいずれも、選挙の際には複数の政党が政党連合を組んで統一リストを作成することが一般化しているため、すべて政党連合である。また、そうした主要政党連合に地元政党が参加しているケースの場合は、ここでは主要政党連合として計算している。
- (14) 選管が発表した選挙結果には白票などの無効票が含まれていないため、ここでは便宜的に有効投票数を総投票数とみなして計算している。
- (15) ただし、後述するように、6月に選挙が行われたニナワ県、アンバール県では、デモが続いて政情不安が継続している状況を反映し、選挙結果においてもより小党が乱立する傾向が見られた。
- (16) クルド政党は、2009年の県議会選挙及び2010年の国民議会選挙にはバグダード県に出馬していたがいずれも議席獲得には至らず、今回の選挙では同県には出馬しなかった。なお、今回からバグダード県では少数派枠でシーア派クルド人に1議席が割り当てられているが、クルドの主流政党はスナ派が中心であり、過去にバグダード県でクルド政党に投票した層と今回の少数派枠の投票層は、必ずしも重ならない可能性がある。
- (17) 拙稿「イラクにおける米国の六年一治安状況の変遷とその政治的影響」『海外事情』2009年4月号参照。
- (18) Ali, Ahmed, "Iraq's Provincial Elections



- and their National Implications,” Institute Study of War, Apr 19 2013, p.4.
- (19) al-Sumaria News, 2013.06.16, 2013.06.20.
- (20) Ali, op.cit., p.3.
- (21) Ain, 2013.05.06. ただし、6月に実施されたニナワ県の選挙でシーア派大連合が得た1議席はここには含まれていない。
- (22) Aswat al-Iraq, 2013.04.14.
- (23) Ali, op.cit., p.4, p.5, p.7.
- (24) 2010年12月の政権発足時にはISCIのアブドゥルマフディが副大統領に就いていたが、2011年5月に辞任している。
- (25) Niqash, 2013.04.11.
- (26) Inside Iraqi Politics, Issue No.65, pp.4-7.
- (27) Swell, Kirk, “Sunni voters and Iraq’s provincial elections,” The Middle East Channel, Jul 12 2013.
- (28) al-Sumaria News, 2012.08.02 ; Ain, 2012.08.07.
- (29) AFP, 2013.04.07 ; Idha’ al-Iraq al-Hurr, 2013.04.10.
- (30) Iraq Oil Report, 2012.06.14 ; DW, 2013.04.03.